

園長だより NO70

先日、あるニュースで渋柿を収穫している保育園の映像が流れました。たくさんの渋柿はかごの中にこぼれんばかりに入っていました。子ども達も目の前の光景に目を輝かせていたのが印象的でした。普段から目にしている柿の木、でも、いざ収穫したら思いもよらぬ量に子ども達はいろいろな思いを描いたに違いありません。



ある子は食べることにつなが、いろいろと考える。ある子は柿の木に思いをよせ「たくさんつけたね」と木の労をねぎらう思いを抱いたり、10人いればその感じ方や思いの違いがみられます。

そばにいる大人が子ども達の表情や言葉に出ていない内面を読み取ってあげ、わかっただけでよいとする気持ちがあれば、その体験は豊かになっていくのでしょうか。

子どもの頃、一口食べてその渋さに仰天したことを記憶しています。

干し柿は先人の智慧が生み出した極めて珍しい食料と言われています。

本来なら捨てられてしまう渋い柿が太陽の恵みを得て甘く、甘くなり「干し柿」になります。

ニュースで登場した保育園の子ども達は貴重な体験をしたのだな—と思います。

山のように収穫できた渋柿を軒につるした

ところはとても風情がありこころを和ませるものでした。

自然の恵み — お芋ほり

つい先日、おおぞらの子ども達もさつま芋ほりにいきました。年々、気象条件は悪くなるばかり、日照不足や長雨などで生育の不良がみられます。そもそも、農家さんではなく素人が知恵をいれ、あれこれとやっているわけですから、良質なものは期待できないのですが心をこめて育てたと思えば、どれも「愛らしいお芋にみえてきます。」

一般的なお芋ほりは掘る場所を丁寧に区画され、とりあえず掘ってみようかと促されることが一般的です。農園に依頼している園などは時間の制約もあるので十分、満足な時間がとれないこともあります。ただ、どの子どもにとっても土とふれあい、収穫の体験は貴重なものとなっています。

おおぞら保育園ではじっくりと時間的な余裕をもち取り組ませてあげています。

それぞれの子供達がどんな思いを持つのか、何を感じているのか、ひとり、ひとりの感じ方に共感したいと思っています。

仲間同士でその時の感情を伝え合っている。なかなか掘り出せない芋を協力して掘っている、大きな芋も虫が何匹も出てきて、お芋から



話題はいも虫になったり、子どもの見せる様々な姿がお芋と共に大きな、大きな成長の収穫になります。

だからあえて、許せるだけの時間をつくりその空間が子ども達のものになるようにしています。

自然体験が表現に繋がる

4、5歳児が芋ほりを終え帰ってくる光景は毎年印象的です。なぜか誇らしげ、自信満々、年下のクラスの子供達が興味を持ち近づくと芋ほりの体験を事細かく伝えている。たらいでのイモ洗いではまさに得意顔で「僕たち、私たちにしかできないの」と言わんばかりに熱心に洗います。

時には小さな子も仲間に入れてあげたり、作業のおすそ分けをしてあげたり、畑での体験も伝えています。

小さい子ども達もお芋に触れ、お芋ほりにいった気持ちになります。

2歳児は興味が多感な時期、「なんだろうなんだろうと興味深々」畑での体験はないが間接的にお兄さん、お姉さんとお芋を通していろいろな思いを抱きます。こころの内に感じたことをため込んでいきます。

そんな時、保育者は普段からやっている絵の具で描くことを無理なく子ども達に投げかけました。

子ども達も自然と筆をとります。思いとタイミングがマッチングすると感じたこと



が腕のストロークを自在につかい、線となりあらわれてきます。

感じたことを感じたままにダイナミックに描いています。



仮に経験として「たのしかったお芋ほりを描いてみましょう」と課題要素が色濃く出ている場面だったら上記のようなエネルギーたっぷりの線は出てきません。



大人の心持で変化が

子ども達が生活の中で出会い、様々なことに大人が柔軟に対応することができれば、視野が広がりどんどんと新しい世界が見えてきます。日々の生活で起こることを予測しそれに素早く順応できる力を保育者は養わなければなりません。4、5歳児のお芋ほりの体験をつなげ、それを端からみていた小さい子ども達の心情、興味、関心を積み上げてきた活動に結び付け取り組んでいました。

大人の心持一つで豊かな表現が生まれている姿がみられました。

(園長 廣部信隆)

